

Title	幼小中高ダンス教育におけるCreative Dance授業の実践 : Laban Movement AnalysisおよびBartenie Fundamentalsを 基に
Author(s)	橋本, 有子
Citation	人間発達研究
Issue Date	2017-12-20
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10083/62129">http://hdl.handle.net/10083/62129</a>
Rights	
Resource Type	Departmental Bulletin Paper
Resource Version	publisher
Additional Information	

This document is downloaded at: 2018-01-21T12:36:11Z



Ochanomizu University

〈論文〉

## 幼小中高ダンス教育における Creative Dance 授業の実践 —Laban Movement Analysis および Bartenieff Fundamentals を基に—

橋本 有子

Keywords: Laban Movement Analysis, Bartenieff Fundamentals, Creative Dance, ダンス教育, 幼小中高

### 1. はじめに

本研究のテーマである Creative Dance は、『創作ダンス』と訳すことができる。しかしながら、日本の創作ダンスと歴史背景が異なる欧米での Creative Dance は、そのアプローチと内容が異なる。Joyce (1994) は Creative Dance について、「非機能的にそして個人の表現として身体の動きが使われる唯一の活動である。包括的でマインド、身体、そして魂の集中を必要とする (Joyce : 4)」と述べている。日本と英国での舞踊教育について比較した小松 (1997) は、既存作品を習い覚える舞踊教育に対し、日本では「創造的芸術体験としての表現運動・創作ダンス」の名称が定着してきているが、英国では舞踊理論の父と言われる Rudolf von Laban<sup>1</sup> の影響を受け「様々な運動経験を提供し創作する舞踊教育」が公教育の中に浸透していった、と述べている。英国で始まった Creative Dance はのちに米国にも共有され発展したため、英米両国の Creative Dance に対する基本的な考え方は類似している。本研究では、筆者が Laban Movement Analysis (LMA)<sup>2</sup> および Bartenieff Fundamentals (BF)<sup>3</sup> を基に米国ニューヨーク州郊外の幼・小・中・高で行った Creative Dance 指導実践についてまとめたため、英語表記の『Creative Dance』を用いる。

Creative Dance について検討された研究は、日本においてもいくつかある。小松 (1997) は日本と英国のダンスにおける学習指導要領の比較を行い、「日本では直接具体的な題材や表現内容を示したものが多く、英国ではまず、身につけるべき運動名や身体支配に関する内容が列挙されている (小松 : 28)」と述べている。大貫 (1995) もまた、日本のダンス教育が大切にする「表現」ありきの授業展開の難しさについて述べ、ダンス内容に対し、その問題解決を図る内容・方法としての「課題学習」、中でも LMA を用いた「運動課題」を提案している。その他、英国での Creative Dance の観測内容を報告 (高野 : 2006, 2007) したものや、LMA を用いた Creative Dance の身体表現の分析 (Yamaguchi ら : 2017) もある。しかしながら、LMA/BF に基づいた Creative Dance 授業実践を自ら行い報告した研究は見当たらない。

従って本研究では、筆者が LMA および BF を基に米国ニューヨーク州郊外の幼・小 (T School) 中・高 (A School) で行った Creative Dance 指導実践とその理論的背景について述べ、Creative Dance 授業を進める上でのそれらの有効性について検討することを目的とする。理論的背景として米国ダンス科教育の歴史、Creative Dance、及び LMA/BF について述べる。また指導実践では、学校教育の中で LMA/BF がどのように活用され、一つの動きのコンセプトが対象学年によりどのように発展・応用可能か紹介・考察する。

### 1-1. 米国ダンス教育の歴史

米国のダンス科目も日本と同様、体育科教育の中に位置付けられていた歴史があり、Krausら（1991）は、ダンス科教育として独立していったのは1980年代であると述べている。ダンス科教育の必要性、重要性が初めて広く認知されたのはNational Standards（米国学習指導要領）の中にDance Standardsが入った1991年のことである。National Standardsの傘下にあるStates Standards（各州学習指導要領）はダンス科教育を含むか否か任意であったが、9年後の2000年には50州のうち49州が取り入れている。National Dance Education Organization（NDEO）は、教育の内容およびStandardsの発展と発信の中心的役割を持つ団体として1998年に発足し、現在もダンス科教育を牽引している。

筆者が大学院を修了したState University of New York, College at BrockportのDance Departmentの学科長を務めたDavis（2016）, Ph.D., CMA<sup>4</sup>は自身が若手教員だった当時の様子について「アメリカでは1960年代頃までダンス科目は体育科の中に位置していた。米国のダンス科目では、英国で始まったLaban Movement Analysis（LMA）が基盤のMovement Education/Educational Gymnastics（動きの教育）を学んでいる。体育科の中で当たり前の様に使われている言葉や概念はLMAからきているものが多いが、LMAの名は余り残っていない」と述べている。Brehmら（2006）もまた、動きの原理についてまとめたLMAは、体育、ダンスセラピー、そしてCreative Danceに大きく影響したと述べている。

### 1-2. Creative Dance

Creative Danceは、上記のダンス科教育の発展と共に確立してきている。Children's Danceと同義で扱われることもあるが、Creative Danceは全ての年代向けである。Brehmら（2006）は、「Creative danceの学びは、Kinesthetic awareness（運動感覚意識）を開拓する。そして個人が持っているルーティーンであるkinesthetic loopの動きの癖から脱することができる（Brehm:9）」とし、身体、感情、知能、創造、そして人間関係技術をも高める一助となる、と述べている。Gilbert（2006）はCreative Danceにおける多種多様な感覚（聴く、見る、言語化、そして実際に行動・経験すること）及びその包括的アプローチは、脳と直接的に深い関係性があると述べ、『Brain-Compatible Dance Education』と名付けている。

Brehmら（2006）は、Creative Dance概念に影響を及ぼした人物として、ダンスを人間の可能性を高めるアートとして捉えたダンス理論/教育者三人のうち、一人はLMAの創始者であるRudolf von Labanだと述べている。Movement principle（動きの原理）をまとめたLMAは、Creative Danceで用いられている『Elements of Dance』の軸となっている。

### 1-3. Laban Movement Analysis とダンス教育

Laban Movement Analysis（LMA）は人の運動分析の基礎的理論であることから、日本でもこれまで様々な研究に用いられている（増山：1993；中田ら：2001；櫛田：2007；増田ら：2011；岡田：2014；西田：2014；Kajiwaraら：2016）。LMAの創始者であるRudolf von Labanは、動きの原理に基づく言語及び記号を考案し、ヨーロッパでは特にダンス科教育に注力した。その教育法は米国へも引き継がれ米国

の大学ダンス科教育をはじめ、幼小中高でのダンス科教育における Creative Dance の発展にも大きく貢献している。米国大学ダンス科教育のカリキュラムにはダンス技術、振付、歴史、指導法、音楽などに加え、動きの理論として LMA が組み込まれており、筆者はその教育を受けている。その後、2014年に NY 州ブルックリン市にて Certified Movement Analysis : CMA (LMA/BF を専門的に扱える人の資格) を取得した。Rudolf von Laban の弟子であり米国に彼の理論を紹介した Bartenieff (1980)<sup>5</sup> は、著書 *Body Movement* の中で「オーストラリア、イギリス、西ドイツの学校、そして 25 の米国の大学で LMA の指導が行われている (Bartenieff : preface ix)」と述べている。高野 (2007) は英国における『ラバン理論に基づいた Creative Dance 指導に関する考察』を発表しており、表現運動指導には専門的知識・経験を持つ人材が必要であると述べている。米国では、現在ダンス科教育の高等教育機関の増加と共にその数は増え、大学教員の資質に Ph.D の他 CMA が求められている。

Laban (1975) は著書 *Modern Educational Dance* の中で、それまでにはない新しい表現の形を『New Dance』と呼び、米国ではモダンダンスと呼ばれていると述べている。同著書の中で、自身の理論をどの様に教育の現場で取り入れられるかをまとめ、「指導者に必須の技術は、人間の動きの原理に対する普遍的な見通し (Laban : 12)」だと述べ、人の動きの原理—すなわち LMA—を学ぶ大切さを強調した。また、「new dance テクニックは知的知識と創造的能力を融合させることができるものであり、これはどの教育においても重要な役割を果たす (Laban : 13)」と述べている。櫛田 (2007) はアメリカ、イギリス、日本の舞踊教育について考察する中で、Laban はあらゆる身体運動を科学的・芸術的観点から記録・分析しており、その功績はダンスの発展に大きな影響を与えたといわれている、と述べている。

#### 1-4. Labanotation

Laban は『*Art of Movement*』を提唱し、人の動きそのもの、その世界が表すものの奥深さに夢中になり研究を続けた。動きに対応する記号を考案し動きの記譜法を確立した Labanotation (Laban 動作記譜法) も彼の大きな功績である。堀野 (1995) はこれについて「運動記譜法は、ラバン記譜法の出現によって、動きの記録・分析・再現の三側面に関する的確で立体的な実践的応用が可能になったといえる (堀野 : 52)」と述べている。実際の教育現場では、Motif (モチーフ) と呼ばれる記譜法簡易版の使用が主流である。これらの記号により、動きを記録できるだけでなく記号から動きを創作することもできる。Laban に関する書を多く執筆している Ullman (1975) は編集著書 *Modern Educational Dance* の中で「動きの言語は学習者の中で段階を経て確立され、それと共に表現力が豊かになっていく (Laban : 109)」と述べている。本稿で紹介する教育実践においても、動きの記号を用いて創作活動に繋げている。中高生の授業実践では、記号を用いた動きの創作に加え、互いの動きの観測を行い、目で捉えられる動きを記号を用いて記譜する実践も行った。

## 2. Creative Dance の授業基本構成

筆者の指導実践は Gilbert (2006) の Creative Dance 授業基本構成を参考にした。以下にその流れを記す。

- 1) 導入 / ウォームアップ (本授業のコンセプト及び目標の確認)
- 2) コンセプトの探求
- 3) 応用
- 4) 創作 (即興、振付、場合により発表を含む)
- 5) クーリングダウン (本レッスンの振り返りを含む)

### 3. Warm-up: Bartenieff Fundamentals 理論から発展した Brain Dance

Gilbert (2006) が提案する Creative Dance 授業の始めに行う Warm-up に Brain Dance がある。これは Bartenieff (1980) が確立した Bartenieff Fundamentals のうち、からだの動きを構成する 6 つのつながり (Body Organization) を軸につくられた、一連の流れを持った動き / ダンスである。Bartenieff は Laban の弟子であり、からだを一人称で捉える Somatics<sup>6</sup> のパイオニア世代である。6 つの Body Organization は誕生から約一年後の歩行に至るまでの、人の動きの発達に基づいており、Gilbert は Brain Dance について「Brain dance は中枢神経系と結びついている主要な運動発達パターンを基とし、それらの動きを経験する度に脳がそれを認識しからだをマインドを効果的に統合する (Gilbert:36)」と述べている。Laban (1948) もまた、Modern educational dance の中で「子どもたちの発達学的な運動の研究が、正しい形のダンストレーニングのための有益な基礎となる (Laban:19-20)」と述べている。以下は 6 つの Body Organization (\*) を含む Brain Dance の流れである。

- 1) Breath (呼吸) \*
- 2) Tactile (触覚)
- 3) Core-Distal (中心-端) \*
- 4) Head-Tail (頭-尾) \*
- 5) Upper-Lower (上半身-下半身) \*
- 6) Body-Side (右半身-左半身) \*
- 7) Cross-Lateral (斜め) \*
- 8) Vestibular (回転)

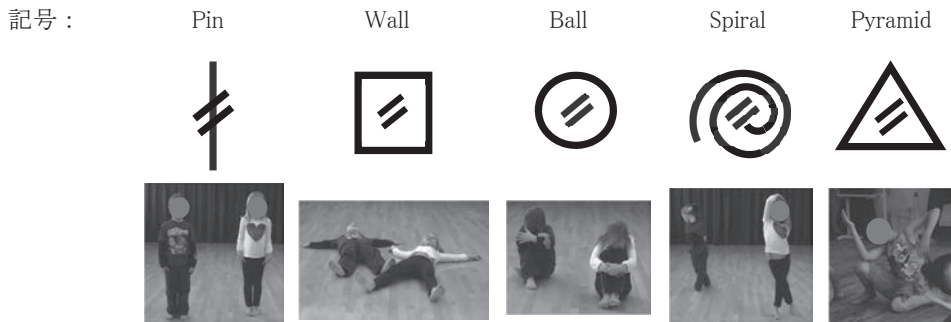
### 4. 筆者の Creative Dance 授業実践

Laban Movement Analysis の 4 つの視点のうち、Shape カテゴリーにおける Basic Body Shape のコンセプトを使用した授業を対象年齢ごと (K<sup>7</sup>: 4-5 歳、1-2 学年: 6-7 歳、中高生: 13-18 歳) に発展させ、実践した。LMA の理論体系確立において、Laban の生存中も没後も弟子達の貢献は大きい。Shape カテゴリーは特に、Warren Lamb、Judith Kestenberg、Irmgard Bartenieff が関わっている。Basic Body Shape は人間のからだや動きを形・型として考えた時の基本的な形・型 5 つである。Pin は鉛筆のような棒状で 1 次元、Wall は紙のように横の広がりを持つ 2 次元、Ball, Spiral, Pyramid は上下左右前後があるボリュームを持った 3 次元的な形・型である。本コンセプトを用い、学年が上がる毎に創作のタスクを含めた授業内容が複雑になるようにした。創作に関し K では全身で一つの形・型を三種類表現すること、1-2

学年では上半身下半身に分けて上下種類の異なる形・型を同時に組み合わせ、全部で3種類表現すること。中高生は上半身下半身に分けて上下種類の異なる形・型を同時に組み合わせ、全部で5種類表現すること、お互いの形・型を観測し記号を用いて記譜すること、2人以上のグループで創作活動を行うことを課題とした。

小学校3～6学年は、T schoolの既存カリキュラム（世界のダンス）に沿わせるためCreative Dance実践は行っていない。以下、2で述べたCreative Dance授業の枠組みに沿い1-2学年授業計画および内容（計5回の35分～40分授業）を中心に記載する。Kの内容で異なる所は、時間毎の注意点に記した。なお、各クラスの人数は30名程度である。

#### 4-1. 授業テーマ：自分のからだで5つの基本の形・型をつくってみよう



- 対象学年：1-2 学年
- クロスカリキュラム（含まれる他教科のコンセプト）：算数（図形：1次元、2次元、3次元）
- マルティプルインテリジェンス理論（Gardner：1983）に当てはまる知性・知能：Bodily-kinesthetic, Interpersonal, Intrapersonal, Musical, Spatial.

#### 4-2. 本授業実践が従った National Standards 及びニューヨーク州 Standards は以下の通りである

- National Standards (Dance-Grades K-4)<sup>8</sup>
  - ✓ Content Standard #1：ダンスパフォーマンスにおいて、動きの要素とその技術を認識し実演できる Achievement Standard
    - ・パフォーマンスの中で、動きの技術、身体意識、集中力を実演する
  - ✓ Content Standard #2：振付の原理、過程、そして構造を理解する Achievement Standard
    - ・他のものから得たコンセプトと自分のアイデアを基にダンスを即興で創り、そして発表する
    - ・動きの発見に即興を使い、動きを発明し、動きの問題点を解決する
    - ・一人でも、パートナーと一緒にでも効果的に作業ができる

➤ ニューヨーク州 Standards (Dance-Elementary Level)<sup>9</sup>

✓ Standard 1 : 創作、パフォーマンス、そして活動への参加

- ・ 正式あるいは正式でない場においてセットされたダンスを発表する
- ・ 自分の動きのアイデアを基に即興し、創作し、そして発表する
- ・ 振付の原理、過程、構造、またダンス作品における様々な役割について理解する

生徒は以下のことを達成する：

動きの要素と技術を認識し実演する

決まったダンスの型の中で、人々と、物と、そして環境と関連して動く方法を実演できる

自分の動きのアイデアを基に、シンプルなダンスを創作、発表できる

4-3. 本授業「自分のからだで5つの基本の形・型をつくってみよう」における学びのターゲット及びコンセプトは以下の通りである。

- ー自己責任を持って安全にダンススタジオの中を動くことができる
- ーBasic Shape Forms (Pin, Wall, Ball, Spiral, Pyramid) の要素を認識することができる
- ーPin, Wall, Ball, Spiral, Pyramid 要素を含む、短い流れのある動きのまとまりを創作、発表、観測することができる

4-4. 毎授業（一時間目～五時間目）毎に異なるサポートターゲットは以下の通りである。

- 一時：Pin, Wall, Ball の要素を使った形・型をからだで作ることができる
- 二時：Spiral, Pyramid の要素を使った形・型をからだで作ることができる
- 三時：Pin, Wall, Ball, Spiral, Pyramid の要素を使った短いダンスを『創作』することができる
- 四時：Pin, Wall, Ball, Spiral, Pyramid の要素を使った短いダンスを『発表、観測』することができる
- 五時：Pin, Wall, Ball, Spiral, Pyramid の要素を使った短いダンスを『発表、観測』することができる

## 4-5. K及び1-2学年 授業内容 (5回) (35分～40分授業)

一時間目 : Pin, Wall, Ball

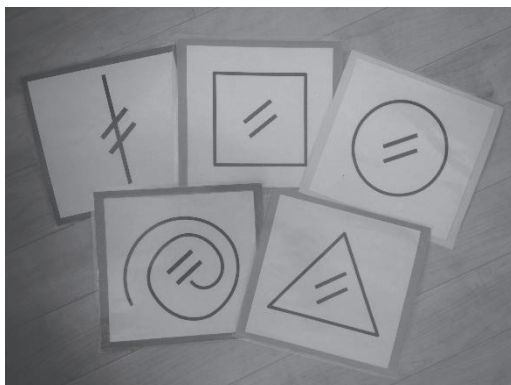
	時間配分	実施事項	注意点
1. 導入	5-7分	Brain Dance 動きの中で Pin, Wall, Ball を紹介する	音楽は Ann Green Gilbert の Brain Dance 及び筆者の用意する音楽を使用
2. コンセプトの探求	10分	Word Wall <sup>10</sup> の確認 3つの形・型の記号と動きを照らし合わせる 自身の指を使って3つの形・型を体現する	Pin はペン Wall は紙 Ball はボール
3. 応用	10分	教員と同じ形・型を創る あなたのユニークな形・型を創る 3つのレベル (Low, Middle, High) を紹介して、形・型と組み合わせる	Kには全身を使ったシンプルな形・型、 1-2学年は片足立ちや手足の動きが異なる、 より難しい身体操作が必要な動きを入れる
4. 創作	10分	クロスフロア：フリーダンス+ stop and freeze! 最後の静止時に好きな形・型をからだで創る	クロスフロア (スタジオを斜めに横切る) の最終地点の床に Pin, Wall, Ball の カードを置く※5つの Basic Body Shape 記号カード参照
5. クーリングダウン	3分	今日の3つの形・型を声に出す 好きな形・型を帰りがけに教員に口頭で伝える	

二時間目 : Spiral, Pyramid

	時間配分	実施事項	注意点
1. 導入	5-7分	Brain Dance 動きの中で Spiral, Pyramid を紹介する	音楽は Ann Green Gilbert の Brain Dance 及び筆者の用意する音楽を使用
2. コンセプトの探求	10分	Word Wall の確認 2つの形・型の記号と動きを照らし合わせる 自身の指を使って2つの形・型を体現する 教員のスパイラルとピラミッド形・型を紹介。 3つのレベル (high, middle, low) を復習	Spiral は紙で作ったスパイラル蛇 Pyramid は積み木
3. 応用	10分	教員と同じ形・型を創る あなたのユニークな形・型を創る	Kには全身を使ったシンプルな形・型、 1-2学年は片足立ちや手足の動きが異なる、 より難しい身体操作が必要な動きを入れる
4. 創作	10分	クロスフロア：フリーダンス+ stop and freeze! 最後の静止時に好きな形・型をからだで創る	クロスフロア (スタジオを斜めに横切る) の最終地点の床に Spiral, Pyramid の カードを置く※5つの Basic Body Shape 記号カード参照
5. クーリングダウン	3分	復習：これまで習った5つの Basic Body Shape を指でつくる	読み聞かせ本： 'Shape Space' by Cathryn Falwell



※ 5つの Basic Body Shape 記号カード



三時間目：創作

	時間配分	実施事項	注意点
1. 導入	5-7分	Brain Dance 動きの中で5つ全ての形・型を復習する	音楽は Ann Green Gilbert の Brain Dance 及び筆者の用意する音楽を使用
2. コンセプトの探求	10分	Word Wall の確認 ダンススコアを紹介し作成法を説明する 指導者二人のスコアと創作したダンスを紹介する 二人組でデュエット創作をすることを伝える	
3. 創作準備	5分	二人組になる Dance Score (振付シート) と鉛筆を取りに来る	
4. 創作	15分	3つのBOXの中にシンボルを書く (K, 1-2 学年により異なる。具体例は以下、 ※ Dance Score (振付シート) に示した) 記号を動きに起こす	※ K は全身で3つ、1-2 学年は上半身と下半身に分けて5つ全部使う
5. クーリングダウン	3分	今日のクラスの復習及び総評 発表の告知	発表にむけて各自練習するように告知をする

※ Dance Score (振付シート)

K : 全身で Basic Body Shape 3 つを使って表現

Choreographers: Belle and Aidan  
 Class: COOLCATS

**K Target Tracker**

Learning Targets: I can create a short dance phrase using the element of Basic Shape Forms.

Use three Basic Shape Forms in your dance:

Pin Wall Ball Spiral Pyramid

Our Dance Score:

Start [Shape 1: Ball] [Shape 2: Wall] [Shape 3: Spiral] End

1-2 学年 : 上半身と下半身で Basic Body Shape 5 つ全てを使って表現

Choreographers: Grace and Sofia  
 Class: FF

**1-2 Target Tracker**

Learning Targets: I can create a short dance phrase using the element of Basic Shape Forms.

Use five Basic Shape Forms in your dance:

Pin Wall Ball Spiral Pyramid

Our Dance Score:

Start [Shape 1: Pin] [Shape 2: Ball] [Shape 3: Pyramid] End

四時間目および五時間目：発表 1、2

	時間配分		
1. 導入	5-7 分	Brain Dance 動きの中で 5 つ全ての形・型を復習する 観る人の役割について説明をする	音楽は Ann Green Gilbert の Brain Dance 及び筆者の用意する音楽を使用
2.. 練習	5 分	パートナーとリハーサル	
3. 発表	10 分	発表、映像記録	
4. 発表	10 分	発表、映像記録	
5. クーリ ングダウ ン	5 分	総評	

4-6. 評価方法 (T school の評価方法による)

評価は以下の 2 つの方法で行った。

1) 4 章で述べた学びのターゲットを基に 4 段階で評価した。

➤ 学びのターゲット / コンセプト (授業：自分のからだで 5 つの基本の形・型をつくってみよう)

–安全に自己責任を持ってダンススタジオの中を動くことができる

–Basic Shape Forms (Pin, Wall, Ball, Spiral, Pyramid) の要素を認識することができる

–Pin, Wall, Ball, Spiral, Pyramid の要素を含む短いダンスフレーズを創作、発表、観測することができる

評価		内容 (いずれも、主に練習や発表の中で)
習熟	4.0	知識内容の深みのある理解を示し、学びのターゲットに対し予想を超えた素晴らしい実演を行う
熟練	3.0	熟練さを示し、外せない主要な技術と学びのターゲットの知識の実演を含む
熟練の発展途中	2.0	熟練に向かっていることを示すが、学びのターゲットの達成には時間をかけ練習を行う必要がある
改善の必要あり	1.0	活動の質が不十分で、学びのターゲットの知識と技術の実演が未完成である

2) 美術、ダンス、音楽、体育 に特化した K4 「Super subject HOW document」 で評価した。

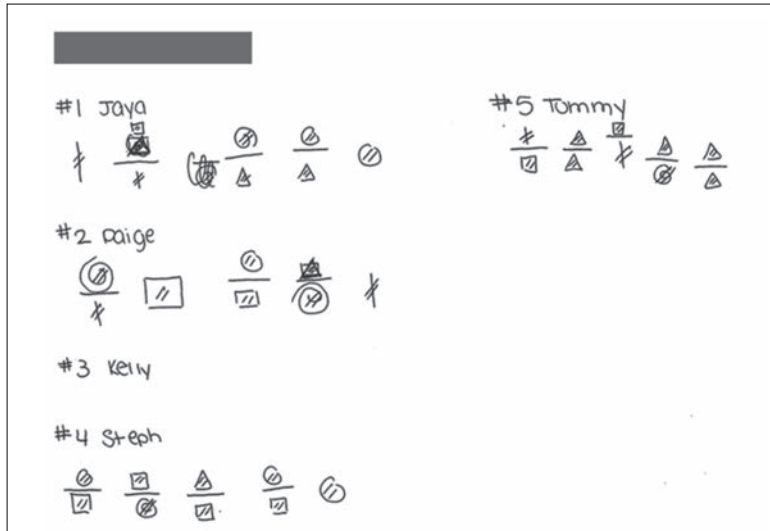
根気	ダンスコンセプト / 技術が難しいときでも諦めず頑張る
真摯	真摯に、誇りを持って質の高い活動を生み出しながら踊ることができる
責任	学ぶ準備ができている状態で授業に来て、責任を持って流れに従うことができる
敬意	創作、発表しているとき、またクラスメイトに対して敬意を表すことができる

## ※中高生授業内容 (計6回) (30分～35分授業)

時間	テーマ	導入	コンセプトの探求	創作・発表
1	5つのBasic Body Shape	Basic Body Shape 及び記号の紹介	Shape 記号の例を紹介・様々な形・型をからだで創る。上半身下半身が分かれる形・型。レベル：高低差のコンセプト (低・中・高)	好きな形・型を3つ決め、流れるように繋げる。2～4グループに分けて相手グループを観測する
2	Mirroring 及び Positive, Negative space	前授業 (Basic Body Shape) の復習	二人組：鏡のコンセプト (お互い向き合い同じ形・型) と positive, negative space (からだがある場所が positive, 無い場所、隙間が negative space) の紹介	曲に合わせて8カウントずつ繰り返す。2～4グループに分けて観測する Aが形・型を創りBがAの negative space に入り込む Aはすっと抜けてBの negative space に入り込む
3	Positive, Negative Space を使った巨大 Shape づくり	前授業 (Negative, positive) の復習	二人組：形・型の作り手と作られる人を決め、お互いに形・型をつくりあう	二人組：形・型の作り手と作られる人を決め、作り手はパートナーをスタジオの中心に移動して好きな形を創る どのペアもスタジオの端から始め、クラスの半分の人数でスタジオ中央に大きな形・型を1つ創る
4	5つのShapeを使ったダンスフレーズの創作	Dance Score (振付シート) の通りにShapeを創る	5つのShapeを記載 (上半身下半身を分ける、高低差をつける) し、交換する (自分のDance Scoreは使わない) Dance Scoreにある記号をからだで表現	2～4グループに分けてお互いに観測する
5	5つのShapeの発表、観測、記譜	自身のShape dance フレーズを回顧および練習する 一つのShapeにつき8カウントずつ動く	自分のダンスをグループ内で発表 残りの4人は何の形・型が見えたか観測・記録する	(つづき) 各生徒自分のダンスをグループ内で発表 片方の4人は何の形・型が見えたか観測・記譜する
6	Directional Shape (動きの形・型)	Directional Shape (動きの形・型) の紹介 主に腕や足の動きが1) かただの中央から末端へ向かう2) 末端に居続け境界線を張り続ける3) 自分の周りの空間をカーブのある動きで切り込む	5人グループを作成 それぞれの5つの形・型を保ったまま、全員同時もしくは時間差をつけるなどタイミングを決める 形・型に行くまでのプロセスをどのDirectional Shapeを使うか決める ※ positive negative space, 高低差の要素も含めること	グループ毎に発表、互いに観測する

※ Dance Score (振付シート)

中高生：上半身下半身に分け、5つ全ての記号を使用している。以下の記譜は5人グループになり、自分以外の仲間4人分の動きを観測し、記したものである。



## 5. 結果および考察

K :

LMA の Basic Body Shape の 5 つの形・型を学んだのち、創作では、選んだ 3 種類の形・型を一連の流れとしてダンスを創るよう促した。コンセプトの探求においても、大まかな形・型を全身でつくることを目的とし、細かな手足の調整は求めなかった。実際に子どもたちから生まれた形・型は、例えばブリッジで全身を使った大きな Ball や Wall で片足立ちになるなど、クラス全体で探求は行っていないものも、ペア独自の創造的な形・型として表れた。発表では二人が共同で同じ形・型を 3 つ、言葉を発さずに一連の流れで一緒に行う、というのは難しく、身体で表している形・型を声に出し、互いに言葉を交わしながら確認し合う様子は多々見られた。また、一連の流れが頭では分かっている、考えた形・型をスムーズに自分の身体で表現するのに時間がかかっているように見受けられた。

小学校 1-2 学年 :

LMA の Basic Body Shape の 5 つの形・型を学んだのち、創作では、5 種類全ての形・型を含んだ（上半身・下半身で異なるものを組み合わせる）全部で 3 種類の形・型を一連の流れとしてダンスを創るよう促した。コンセプトの探求では様々な形・型を子どもたちと一緒に考えながら、ユニークな形・型をつくった子どもを見本に皆で模倣する時間も設けた。半身ずつ形・型が変わると、全体の形・型も複雑になり、高低差も含めペアによる表現方法がそれぞれ特色豊かであった。K では難しかった練習（リハーサル）を重ねて発表をする、ペアで呼吸を合わせる、言葉を発さず動くことも 8 割方可能であった。また、一連の流れを頭でも身体でも理解し動きがスムーズに流れており、Audience（観客）としての態度（発表者に尊敬の念を持ち、目の前で起きている事象に対して能動的に注意を払いながら存在すること）も養われていた。

中高生 :

LMA の Basic Body Shape の 5 つの形・型を学んだのち、創作では、5 種類全ての形・型を含んだ（上半身・下半身で異なるものを組み合わせる）全部で 5 種類の形・型を一連の流れとしてダンスを創るよう促した。コンセプトの探求では身体で創る様々な形・型の実践に加え、Negative Space/Positive Space のコンセプトを使い、個人の形・型が他者と組み合わせた時の関係性について学んだ。一人で動くのとは違う、他者との関係性が含まれることで、動きから得られる新しい発想や創造性が生まれていた。また、1 つの形・型から次の形・型へ移動する動き方を、Shape 理論の中の Directional Shape（主に腕や足の動きが①からだの中央から末端へ向かう②末端に居続け境界線を張り続ける③自分の周りの空間をカーブのある動きで切り込む）で埋め、5 つの形・型が最初から最後まで一連の流れとして隙間なく繋がるように創作した。更に、互いの観測を行い、観たものを記譜するプロセスも踏んだ。このことにより、自分で表現していると思っていた形・型が表れていないことが分かり、よりよい表現のかたちを探求するフィードバックの機会となった。最終的に、高校 3 年生のクラスでは、自分の形・型を保ちながら、他者との関係性を一人からグループに増やし、1 クラス 20 人ほどで、3 分ほどの Shape Dance 作品（群舞）を創作した。コンセプトは、動きの要素を 5 つ含んだ、一人 5 種類の動きのみである。そこから他者との関係性を発展

させ、高さ（低・中・高）、方向性、またリズムの変化等を加えることで複雑化し、テーマに一貫性のあるダンス作品を創造した。K、1-2 学年と同様に、性別及びダンス経験の有無は様々であったが、抵抗なく身体の動きそのものに集中し、最終的にクラスメイト 20 人によるダンス作品として表現が浮かび上がったことが印象的であった。

## 6. まとめ -ダンス / 動きの教育における、LMA/BF の可能性-

本研究では、LMA/BF を用いた Creative Dance の授業実践例として、Shape Dance を取り上げた。LMA/BF を基盤にした Creative Dance は、動きの言語及び記号を提示することで、『動き』そのものに価値を置くことができる。

大貫（1995）が述べる、日本のダンス教育が大切にする『表現』ありきの授業展開の難しさにあるように、『表現』に囚われることなく、動きそのものの面白さからゲーム感覚で様々な身体・身体の動きと出会っていくことは、結果的に『表現』が浮かび上がること、また身体の知恵そのものから生まれる新しい表現の形であるとも言える。また、様々な運動経験、身体の使い方を導く LMA/BF は、『こんな動きしたことがない』という声実際に生徒たちからあがってきたように、個人が持つ動きの枠組みを抜け出す、あるいは癖をなくす手助けになることが分かった。これは小松（1997）が述べる「具体的な題材の表現に偏らず運動そのものの探求をいまま少し日本の舞踊授業の流れに取り入れるべきではないか（小松：37）」という提言に繋がるであろう。

また、高野（2007）の述べる「無から新たに想像することは難しいが、与えられた動きを工夫することによって、自分の身体表現を見出していくことは比較的容易であり、取り組みやすい（高野：45）」といったように、テーマ性から来る表現ではなく、純粋な動きの言語及び記号からの学び、またそこからの創造は、どの年齢・学年にも、共通して有効であることが分かった。年齢・学年別に内容を発展させ複雑にすることは可能であり、それにより、更に深い学びが可能であることも分かった。さらに、振付ではなく、個人から生み出された動きを軸にした『ダンス作品』の創作に繋がられることも確認された。

更に、経験の差が出やすい、好みが別れる可能性があるダンスの学びであるが、当該 Creative Dance 授業展開は、ダンス経験の有無で差が出ることなく創造性を発揮することが出来、むしろ型・枠を持たない方が豊かな創作ができるプロセスを踏んでいる。実際に、ダンスの経験がないからその柔軟な創造性には驚く場面が多々あった。大きな枠における、ある決まったルールの中で自由な発想力が問われ、創造性が育まれるプロセスを、LMA/BF は授業ツールとして提供できたと言えるだろう。

以上のことから、Creative Dance の授業を進める上での LMA/BF の有用性は高いと判断される。今後指導者育成や研究が進んでいくことによって、この有用性がますます高まっていくことが期待される。

注

- 1 モダンダンス理論の父 (1879-1958)。ハンガリー生まれ、建築、絵画、舞台芸術、ダンスなどに携わりながら、人の動きそのものの実践研究を生涯続け、Labanotation を確立し、Laban Movement Analysis の原型をつくりあげた。ロンドン没。
- 2 からだの動き (日常の動きから舞踊やスポーツまで) を「Body」「Dynamics/Effort」「Shape」「Space」の4つを代表とする多角的な視点 (これらは相互に関わりを持つ) により言語化し、物質としての身体の動きに限らない運動全体の特徴を『理解』するために用いられている。応用分野は舞踊、スポーツ、運動評論、心理学、人類学、ロボット工学、コミュニケーション学、リーダーシップ学など多岐に渡る。
- 3 Irmgard Bartenieff が LMA を使い、理学療法の世界でポリオ患者、身体障害のある子ども、またダンサー向けに様々な動きの指導を行う中で編みだしていった独自の理論。哲学及びエクササイズを含み、LMA 中の「Body」に位置付けられている。
- 4 Certified Movement Analyst(CMA) : Laban Movement Analysis/Bartenieff Fundamentals を専門的に扱える人の資格。米国ニューヨーク州ニューヨーク市を本拠地としている Laban/Bartenieff Institute of Movement Studies (LIMS) が資格取得コースを提供。ニューヨーク市以外の米国、南米、ヨーロッパ諸国、中国でもコースを開講している (2017 年現在)。
- 5 Somatics pioneer 第一世代 (1900-1981)。理学療法士。米国に LMA を紹介し、ダンス教育にも注力した。ダンスセラピーの創始者の一人である。
- 6 Thomas Hanna が提唱。ギリシャ語の Soma に由来し、一人称の科学とも言われる。「からだ」を総合的な1つの存在として心身や精神を分離させずに捉える。
- 7 日本の幼稚園に相当。
- 8 <https://artsedge.kennedy-center.org/educators/standards/full-text/K-4-standards#Dance> より。翻訳は筆者による。
- 9 <http://www.p12.nysed.gov/ciai/arts/pub/artlearn.pdf> より。翻訳は筆者による。
- 10 学びのターゲット / コンセプトおよびサポートターゲットが記載されたホワイトボードあるいは壁。導入の Brain Dance 後に子ども達と声に出して読み、その日の目標を明確にする。Creative Dance 授業の大事な側面でもある Gilbert(2006) の考え方「Walk over to the “Word Wall” where dancers will “hear”, “see”, “say” the words as they physically (“do”) demonstrate with upper body the concept.」を参考にした。

<引用・参考文献>

- ・小松恵理子「舞踊の効果的指導法の研究」-日英のナショナル・カリキュラムにおける学習内容の比較を通して- 鹿児島女子短期大学紀要、1997 年第 32 号。
- ・大貫秀明「表現」という呪縛-ダンス教育を一考する-第 46 回日本体育学会抄録集、pp1995。
- ・高野牧子「幼児と保護者を対象とした身体表現の指導構造 LABAN-「Movement Play」コースでの観察調査をてがかりにして」-Research Journal of JAPEW、23 巻、2006 年。



- 高野牧子「ラバン理論に基づいた Creative Dance 指導に関する考察 子どもを対象とした指導事例 調査より」山梨県立大学 人間福祉学部 紀要、2007年、第2号。
- Yamaguchi Tomoyuki, Kadone Hideki 'Bodily Expression Support for Creative Dance Education by Grasping-Type Musical Interface with Embedded Motion and Grasp Sensors' Sensors、第17巻、2017年、第5号。
- Jackie Davis. Interviewed and translated by Yuko Hashimoto. 2016年。
- Mary Ann Brehm and Lynne McNett 'Creative dance for learning' The Kinesthetic Link、2006年。
- 増山尚美「ルドルフ・F・ラバンのダンス・ムーブメント・セラピー」北海道女子短期大学研究紀要、第29巻、1993年。
- 中田亨、森武俊、佐藤知正「ロボットの身体動作表現と生成される印象とのラバン特徴量を介した定量的相関分析」日本ロボット学会誌、2001年、第19号、No.2。
- 榎田芳美「身体表現としての舞踊教育 -アメリカ、イギリス、日本を中心に-」東亜大学 総合人間・文化学部「総合人間科学」第7巻 2007年。
- 増田恵 加藤昇平 伊藤英則「ラバン理論に基づいたヒューマンフォームロボット身体動作の動作特徴抽出と表出感情推定」日本感性工学論文誌 2011年、第10号、No.2。
- 岡田もえ子「身体表現のスタイルーラバンの動きの分析と文体論の融合の可能性の示唆ー」専修人文論集 2014年、94号。
- 西田 明子「ラバン動作解析法概念とダンス / ムーブメントセラピーでの応用 (精神科におけるダンスセラピー : 理論と実践)」ダンスセラピー研究、第8巻、2014年、第1号。
- Kajiwara Yusuke, Shimizu Junichi, Ueda Yoshihiro, Kimura Haruhiko「ラバン身体動作表現理論に基づいた疲労推定」Studies in Science and Technology、第5巻、2016年、第1号。
- Mary Joyce 'First Steps in Teaching Creative Dance to Children' Third Edition、1994年。
- Ann Green Gilbert 'Brain-Compatible Dance Education' National Dance Education、2006年。
- Irmgard Bartenieff with Dori Lewis 'Body movement: Coping with the environment' Gordon & Breach, Science Publishers, Inc、1980年。
- Rudolf von Laban 'Modern Educational Dance' revised by Lisa Ullman Macdonald and Evans、1975年。
- 堀野三郎「身体運動における運動記譜法の応用<2>-ラバン記譜法以前の運動記譜法の史的沿革とラバン記譜法の出現と発展-」Bulletin of Faculty of Education, Nagasaki University: Curriculum and Teaching、1995年、No.25。
- Howard Gardner. 'Frames of Mind: The theory of Multiple Intelligences'、1983年。